ゼミの風景

法学部　田中祥之兼任講師

専門演習Ⅰ（３年次）

「現代中国の改革」

（金曜４限）

ゼミが始まる前の教室では、たびたび大きな笑い声が上がる。ゼミ生同士、とても仲が良さそう。そんな雰囲気の中、定刻より10分ほど遅れて田中先生の登場である。

先生登場

「おそくなりました～」

ヨイショと言って腰を下ろす。隣のゼミ生になにやらツッコミを入れられハハハと笑う。

いわゆる「先生」の風格はゼロ……とまでは言わないが、なんともくだけた感じの印象を受けた。先生が入ってきたのに教室の和やかな雰囲気はそのまま。記者のわたしもすっかりリラックスしてしまっていた。

《田中先生は１９４１年東京生まれ。横浜市立大学文理学部卒業後、出版社へ。今も編集の業務に携わる傍ら78年から中大で講座をもつ。著書に『現代中国の改革』など》

イキイキ、のびのび ホットな中国論じる

来年度のゼミ生に配布予定のプリント「新ゼミ生のみなさんへ」が全員に配られた。来年は生徒数が大幅に増えた（つまりゼミの人気が出た）ということもあって、先生いわく「はりきって」こしらえてきたものらしい。

「どこか変えた方がいいか？　どうだい？」

２、３人が意見を述べた。先生はその都度それを興味深く聞いていた。そうして、

「ボクからはそれだけ」

と言って後の進行をゼミ長の清水貴志さんに託した。このゼミでは、先生が生徒を主導することはほとんどない。先生はあくまで「よき案内役」であり、「何でも言い合える論争相手」を目標としている。

本場の天津？甘栗

一人のゼミ生が「中国のお土産の甘栗」を配り始めた。田中ゼミでは毎年夏休みに中国を旅する。甘栗はそのとき買ってきたものだ（おいしかったですね。これが本物の「天津甘栗」？３つもいただきました）。

そんなわけで、３週間をかける合宿旅行は、費用が少々高めで断念する人もいるが、参加した人はみな、

「また行きたい」

と口をそろえる。一見長すぎる期間だが、その中で北京や上海などの大都市だけでなく、内陸は敦煌、なんとチベットまで回る。この旅行の内容の濃さときたら、「消化不良」を起こすくらい、だそうだ。うれしい悲鳴、か（別稿の「中国研修旅行体験記」参照）。

テーマは注目の「三つの代表論」

さてようやくゼミの本題に入った。今回のテーマは「三つの代表論」。担当の海田みゆきさんがレジュメを配った。そして説明に入ろうすると先生が――、

「海田さんすごいじゃないか。省エネじゃないか～」

先生は両面刷りのレジュメに感激

されたのであった。生徒のイイトコロに気づくと、とにかくほめてくれる……先生のイイトコロである。

海田さんの説明が始まる。となると、今度は先ほどまでのにぎやかなムードは一転。みんな真剣にレジュメを追う。

「三つの代表論」とは、「中国共産党が（1）中国の先進的生産力を代表し、（2）中国の先進的文化が進むべき方向を代表し、（3）もっとも広範な中国人民の基本的利益を代表する」というものである。市場経済をリードする資本家の中国共産党入党を認めた点に大きな特徴がある。

《「三つの代表論」は11月8～14日の第16回全国代表大会で提起された。とくに新時代へ向けた「資本家の入党」は江沢民総書記の置きみやげとされ、胡錦濤氏が新総書記に。世界中のマスコミがトップニュースで報じた》

むろん、ほんらい労働者とは逆の立場にある資本家を共産党に入れるということには、国内において強い批判もある。海田さんは、「三つの代表論では、中国共産党は実質的に『共産党』とは言えないので、民主政党の設立を認め、議会制民主主義に移行するのが効率的ではないか」と意見を述べた。

田中先生（左）を囲んで、大陸的牧歌？の雰囲気

「スバラシイね～」

レジュメはとても分かりやすく、中国政治に無知なこのわたしでもなんとかついていけた。参考文献を見てみると、新書から新聞、WEBサイト、TV番組まで、実に幅広い下調べがなされていたことが分かる。発表が終わると先生はまず一言。

「スバラシイね～」

作り方や議論の展開の仕方などについて、イイトコロをほめまくり、一方で不十分なところの指摘もある。

担当者に質問が2，3出る。

「大事な質問だ～」

などと先生は合いを手を入れ、質問にも回る。

「キミ、なぜボクの本を批判しなかったんだね？」

「御本人がいる前で批判なんてできませんよ」

と、遠慮がちに海田さん。

生徒ともっと「論争」がしたい、そんな表情でもある。

海田さんは自分が持ってきた文献を参考にして他にも質問に答えていった。しかしあまり深くつっこまれて答えに困ってしまうようなときは、先生の出番である。広い知識、詳しい解説も聞けた。

学生が自主的に学んでいく、それを大事にする姿勢がよくわかるゼミ風景である。

そろそろ終わりの時間、このテーマも区切りがよくなってきたところでゼミ長が、

「前半はここまでにします。」

エッ！このゼミ、なんと2コマ続きだった。本来ゼミは1コマで終わるものらしいが、田中ゼミではだいたい2コマ使っているそうだ。

旅でつちかわれた結束は強いなあと思ってしまうわたしであった。

――じつは来年、わたしも田中ゼミに仲間入り。よろしくお願いします。うれしいような、半面ちょっとコワイような。

（学生記者　江部理恵）